



# NOT DOING NEARLY ENOUGH

『地球に住めなくなる日』著者

## デイビッド・ウォレス・ウェルズ

「まずはプラスチック生産量の削減を」

著書『The Uninhabitable Earth: Life After Warming (邦題：地球に住めなくなる日)』で深刻な環境汚染の実態とその危険性について訴え、各方面から反響を呼んだデイビッド・ウォレス・ウェルズ氏。氏によれば、現代社会におけるプラスチックによる汚染で、人間の脳内にはスプーン1本に相当するほどのマイクロプラスチックが蓄積されている可能性があるという。環境へますます負荷をかけているというトランプ政権による“化石燃料ファースト”の姿勢。その実態とは？ CNNが話を聞いた。



インタビュアー

クリスティアン・アマンブール

イラン人の父と英国人の母を持つ。生まれはロンドンだが、幼少期をテヘランで過ごす。英国でジャーナリズム養成講座を修了。渡米し、ロードアイランド大学でジャーナリズムを専攻、首席で卒業。1983年、CNNに入社。数々の紛争地帯で現地取材を行い、ジャーナリストとして高い評価を得る。2021年に卵巣がんで卵巣の摘出手術を受けたことを発表。現在も第一線で活躍する。



ゲスト

デイビッド・ウォレス・ウェルズ

アメリカのジャーナリスト。『ニューヨーク・マガジン』の副編集長を務めた経歴を持つ。気候変動や科学技術の近未来に関する記事を多く執筆。中でも2019年の著書『The Uninhabitable Earth (邦題: 地球に住めなくなる日「気候崩壊」の避けられない真実)』では、気候変動がもたらす脅威を詳細に描き出し、大きな反響を呼んだ。



Listening Quiz

## (57) 脅威の存在「マイクロプラスチック」

*Trump's MAGA movement\* is rolling back plans to mitigate climate change. The Environmental Protection Agency is moving to repeal the so-called Endangerment Finding, which says that fossil-fuel emissions endanger human health and government can do something about it. David Wallace-Wells is an expert who wrote the book The Uninhabitable Earth,\* and I spoke to him about this latest rollback.*

\* \* \*

**Christiane Amanpour** There is a UN plastic-pollution conference under way in Geneva. And you recently wrote an op-ed\* in the *New York Times* about this problem, and one of the most vivid and probably terrifying sentences is “There might be inside your skull the equivalent of a full plastic spoon.” Tell me how you came up with that and what that means.

**David Wallace-Wells** Since I've been writing about climate, I've been seeing news and alarm about microplastics\* in particular. There are also nanoplastics, macroplastics; we talk about plastics in the ocean. And increasingly, we're seeing it inside us too. There are plastics in our kidneys, in our hearts, and, yeah, perhaps most alarmingly, in the brain—so much so that not just does it add up to the equivalent of a plastic spoon in the brain but, actually, that's about one-fifth, by weight, as much as brain stem.

**roll back:**

(政策・計画など)を逆戻りさせる、後退させる

**mitigate:**

～を緩和する、軽減する

**climate change:**

気候変動

**the Environmental Protection Agency:**

(=the EPA)《米》環境保護庁

**repeal:**

～を撤廃する、廃止する

**Endangerment Finding:**

危険性認定

**fossil fuel:**

化石燃料

**emissions:**

排出物質、排出ガス

**endanger:**

～を危険にさらす、脅かす

**be under way:**

進行中である

**vivid:**

印象的な、鮮烈な

**skull:**

頭蓋骨

**the equivalent of:**

～に相当する量、～と同等の分量

**come up with:**

～を考え出す、算出する

**alarm:**

懸念、強い不安

**alarmingly:**

憂慮すべきことに、気がかりなことに

**so much so that:**

～するほどまで

**add up to:**

合計～になる、全部で～になる

**by weight:**

重さにして、重量では

**brain stem:**

脳幹

トランプ大統領のMAGA運動が、気候変動を緩和するための計画を後退させようとしています。環境保護庁(EPA)はいわゆる「危険性認定」を撤廃する方向に動いているのです。この認定によると、化石燃料排出物は人間の健康を脅かすものであり、政府はこれに何かしらの対処ができるとされています。デイビッド・ウォレス・ウェルズさんは『地球に住めなくなる日:「気候崩壊」の避けられない真実』という著書もある専門家です。最近のこの後退についてお話を伺いました。

\* \* \*

**クリスティアン・アマンブール** 国連のプラスチック汚染に関する会議がジュネーブで行われています。あなたは最近ニューヨークタイムズ紙にこの問題について特別記事を寄稿されましたが、最も印象的でおそらく恐怖さえ感じさせる一節は、「あなたの頭蓋骨の中にはプラスチック製スプーン1本に相当する量のプラスチックが存在しているかもしれない」というものです。どうしてそういう結論にたどり着いたのか、また、どういう意味なのか、教えてください。

**デイビッド・ウォレス・ウェルズ** 気候について書くようになってから、私はとりわけマイクロプラスチックについてのニュースや懸念の声に気づくようになってきました。ナノプラスチックやマクロプラスチックもありますし、海洋プラスチックも話題に上ります。その上、我々の体内で見つかることも多くなってきました。プラスチックが存在しているのです、人間の腎臓の中、心臓の中、さらには、そう、おそらく最も驚くべきことに、脳の中にも——それは全部で、脳内にプラスチック製スプーンが1本あるのと同程度だけでなく、重さにすると、実に脳幹の5分の1程度の量になるというわけです。

#### ■ MAGA movement

MAGAは「Make America Great Again (アメリカを再び偉大に)」の頭字語。ロナルド・レーガン元大統領が選挙スローガンとして用いたのが最初だが、現在は主としてトランプ支持層を指して用いられる。

#### ■ The Uninhabitable Earth

原著は2019年刊行。NHK出版から『地球に住めなくなる日「気候崩壊」の避けられない真実』の題で邦訳が出ている。

#### ■ op-ed

新聞社内の記者ではない有識者などが寄稿する記事を指す。社説(editorial)の対面(opposite)に掲載されることから長らくこう呼ばれてきたが、デジタル版の普及によって「対面」の定義が曖昧になり、ニューヨークタイムズ紙では2021年からguest essay(ゲストエッセー)と呼称を改めた。

#### ■ microplastics

通例、マイクロプラスチックは直径5mm未満(または5mm~1μm程度)の微細なプラスチック粒子を指す。ナノプラスチックはそれより小さいもの、マクロプラスチックはそれより大きいものを指すが、厳密な大きさについて国際標準があるわけではなく、研究機関や規制機関によって異なる。